

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 29 日現在

機関番号：82715

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520140

研究課題名(和文)新出と既知の高橋由一作《西周像》について

研究課題名(英文)On the Two Portraits of Nishi Amane by Takahashi Yuich

研究代表者

長門 佐季(Nagato, Saki)

神奈川県立近代美術館・その他部局等・研究員

研究者番号：20393077

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：新出と既知の二枚の「西周像」について、保存科学と人文科学の二つのアプローチから総合的な検証を行った。光学調査の結果、2点の「西周像」は絵具層の顔料および各色の組成などに類似性がみられ、また、資料調査においては、作品の依頼主である旧津和野藩当主亀井茲明に宛てた由一の実子・柳源吉からの書簡二通と画稿二図が新たに発見された。

洋画排斥の風潮の厳しい状況の中、洋画の普及に奮闘する高橋父子にとって「西周像」は晩年の由一の健在ぶりを世に知らしめる重要な意味をもっていた。そうした制作の背景と調査研究の結果を考察し、2点の「西周像」はともに源吉との共働制作である可能性を含みつつ、高橋由一作と結論づけた。

研究成果の概要(英文)：Two portraits of Nishi Amane, one newly discovered and the other already known, were studied from the points of view of both the humanities and conservation science.

Examination of the two works revealed similarities in the composition of the layers of paint and each color or the processing of the ground, suggesting they were painted around the same period using the same paints. Besides a few photographs used for these paintings, two letters containing two sketches for these portraits from Yuichi's son, Genkichi, to Kamei Koreaki, who commissioned these works, were discovered, revealing that Genkichi was deeply involved in the production of these portraits. The early Meiji trend to reject yoga placed Yuichi in a severe situation. To promote Western-style painting, it was necessary to demonstrate his fame as a renowned yoga artist anew. Consequently, we concluded that while Genkichi may have been a joint producer, these two portraits of Nishi Amane are both by Takahashi Yuichi.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史

キーワード：保存修復 光学調査 高橋由一 亀井茲明 高橋(柳)源吉 明治の肖像画

## 1. 研究開始当初の背景

明治洋画の開拓者高橋由一による西周の肖像画といえば、島根県津和野町の郷土館が所蔵する《西周像》が知られているが、これと同じ絵柄の西周の肖像画がもう一点存在していることがわかった。

平成21(2009)年、旧津和野藩主亀井家の十三代目当主<sup>これあき</sup>茲明の曾孫である亀井<sup>これもと</sup>茲基氏から、既知の津和野町郷土館蔵の《西周像》のほかに、同じく津和野の太鼓谷稲成神社にもう一点「西周像」があるという連絡が連携研究者である山梨俊夫氏のもとにあったことから本研究は始まった。現地へ赴き二枚の西周の肖像画を実見すると、新出の《西周肖像画》は、額装されているものの木枠はなく、保存状態の悪さから画面は波打ち、一部に損傷も見られたが、既知の《西周像》に酷似していた。

「西周像」が発表されたのは、由一が亡くなる前年の明治26(1893)年10月に開催された「洋画沿革展覧会」であり、その目録には「第二室六十九号油画」、筆者「高橋由一翁」、出品人「亀井茲明氏」として「西周氏肖像」と記録されている。肖像画のモデルである西周は、津和野藩の出身の思想家であり、オランダで哲学、経済学、国際法などを修め、帰国後は徳川慶喜の側近として、官僚を歴任し、軍政の整備などを行った人物である。

亀井茲明の依頼によって制作された既知の《西周像》は、西家の家紋と「西周君肖像 / 高橋由一氏寫 / 明治廿六年晩冬」と刻まれた額とともに茲明から西周に贈られたのち、西家から津和野町に寄付され、昭和44(1969)年2月に島根県の指定文化財に登録、津和野町郷土館蔵として現在に至っている。これまで展覧会ならびに文献などに紹介されてきたのは、いずれもこの《西周像》である。一方、新出の《西周肖像画》は、太鼓谷稲成神社内の集会室に飾られていたものの、一部の関係者に知見されるにとどまっていた。

## 2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、この新出の《西周肖像画》について、その真贋も含め、作者、制作された時期、背景、動機などをあきらかにすることであった。そこで二枚の「西周像」に対して修復処置を施しながら、並行して光学調査を行って、絵の表面からは判別できない絵画の組成を検証する一方、科学的調査から得られた結果を文献調査によって裏付けることとした。また、この二枚の「西周像」を通じて、これまでほとんど研究されてこなかった高橋由一の晩年期の活動を探るとともに、ほぼ同時代に日本に移植された表現媒体である写真と洋画の関係、ひいては芸術家の個性という概念が確立する過程にあった明治の肖像画のあり方も含めた、芸術における「近代」を考察することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究の特色は、光学調査や材料分析といった保存科学の分野と文献資料の調査を中心とする人文科学の分野の専門家からなる研究会を設け、二つのアプローチから総合的な検証を行ったことにある。

### (1) 保存科学からのアプローチ

新出と既知の「西周像」は、絵柄ばかりでなく、全体から細部にいたる各モチーフの寸法がほぼ一致するなど、多くの類似点が見られたが、より詳細な情報を得るため、研究分担者の伊藤由美氏を中心に、(有)修復研究所21の宮田順一氏、絵画修復家の増田久美氏の協力を得て二点について光学調査と材料分析、保存修復を行った。

まず二枚の「西周像」について、それぞれ正常光撮影、紫外線蛍光写真、赤外線写真、X線写真を撮影した。その後、光学調査として剥落箇所や周辺部分から主だった色の微小な絵具片を採取して顔料分析を行ったが、絵具の採取が難しい箇所については非接触型の蛍光X線分析装置で分析を行った。



津和野町郷土館蔵《西周像》(修復前)正常光撮影



太誠谷稲成神社蔵《西周肖像画》(修復前)側光線撮影

保存修復としては、新出の《西周肖像画》については、木枠が外されていたことから変形が激しく、大きな擦傷のほか複数の傷が見られたため、カンヴァス周辺に帯状の麻布を接着し、変形修正を施した後、破損箇所を修復し、補彩および保護ワニスを塗布した。既知の《西周像》には大きな破損は確認されなかったが、変形と汚れが見られたため、ワニスと汚れを除去し、変形を修正、剥落箇所の充填整形と捕彩の後、保護ワニス塗布を施した。

#### (2) 人文科学からのアプローチ

新出と既知の二枚の「西周像」のある津和野町での現地調査を踏まえ、高橋由一のほかに本作に深く関わる周辺人物の三人—依頼主である亀井茲明、肖像画のモデルである西周、そして高橋由一の息子柳源吉に焦点をあて、

本作の制作の動機や背景に迫ることとした。

依頼主である亀井茲明については、津和野町にある亀井温故館を調査した結果、高橋由一の実子である柳源吉から亀井茲明に宛てた書簡二通と本作に関する画稿二図が新たに発見された。この発見によって「西周像」の制作依頼時期があきらかになったばかりでなく、これまで知られていなかった依頼から制作にいたる過程に関する重要な手掛かりが得られた。

西周については、高橋由一研究の第一人者である連携研究者の青木茂氏、元森鷗外記念館副館長の廣石修氏を中心に「西周伝」および「西周日記」の原本の解読を進める一方、国立国会図書館憲政資料室に保管されている西周関係資料の調査を行った。

先の書簡の発見によって、本作の制作に由一の息子である高橋（柳）源吉が深く関わっていたことがあきらかとなった。そこで、研究分担者である角田拓朗氏を中心に、源吉の他の作例を検証しながら、その足跡を辿った。

## 4. 研究成果

### (1) 保存科学のアプローチによる調査結果

二枚の「西周像」について、それぞれから試料片を採取して光学調査を行ったところ、地塗層に若干の違いが見られるものの、絵具層の顔料および各色の組成や下地の処理などに類似性が見られた。

表1:高橋由一(西周肖像画)太誠谷稲成神社蔵 絵具層と地塗層の試料片調査結果

色(試料片種類)	EPMAによる検出元素	MDGIによる検出化合物*	鑑定成分と備考
赤	Hg, S	—	バーニオンが主成分 細かく粉砕した辰砂と鑑定
赤褐	Mg, Al, Si, K, Fe As	—	酸化鉄系顔料 Asは酸化鉄系顔料の少量成分 赤色レーキ顔料も含有
黄	Cr, Pb	—	クロムイエロー
緑	Cu, As	C <sub>2</sub> H <sub>3</sub> As <sub>2</sub> Cu <sub>2</sub> O <sub>4</sub> [31-448]	エメラルドグリーン
青	Na, Al, Si, S, K	—	ウルトラマリン
黒	Ca, P	—	アイボリーブラック
白	Pb	2PbCO <sub>3</sub> ·Pb(OH) <sub>2</sub> [13-131] PbCO <sub>3</sub> [47-1734]	鉛白
地塗層	Pb, Ca, Si, Al, Fe Ba, S	CaCO <sub>3</sub> [5-586] 2PbCO <sub>3</sub> ·Pb(OH) <sub>2</sub> [13-131] PbCO <sub>3</sub> [47-1734]	鉛白と白亜が主成分 (白亜の含有酸化白を確認) ナトリウムとケイ酸塩化合物は少量から 微量成分

\* [ ]内のNo.は照合したJCPDS-ICDDカードのNo.

表2:高橋由一(西周像)津和野郷土館蔵 絵具層と地塗層の試料片調査結果

色(試料片種類)	EPMAによる検出元素	MDGIによる検出化合物*	鑑定成分と備考
赤	Hg, S	—	バーニオンが主成分 細かく粉砕した辰砂と鑑定
赤褐	Mg, Al, Si, K, Fe As	—	酸化鉄系顔料 Asは酸化鉄系顔料の少量成分
緑	Cu, As	C <sub>2</sub> H <sub>3</sub> As <sub>2</sub> Cu <sub>2</sub> O <sub>4</sub> [31-448]	エメラルドグリーン
青	Na, Al, Si, S, K	—	ウルトラマリン
黒	Ca, P	—	アイボリーブラック
白	Pb	2PbCO <sub>3</sub> ·Pb(OH) <sub>2</sub> [13-131] PbCO <sub>3</sub> [47-1734]	鉛白
地塗層	Pb, Ca, Si, Al, Fe Ba, S	CaCO <sub>3</sub> [5-586] 2PbCO <sub>3</sub> ·Pb(OH) <sub>2</sub> [13-131] PbCO <sub>3</sub> [47-1734]	鉛白と白亜が主成分 (白亜の含有酸化白を確認) ナトリウムとケイ酸塩化合物は少量から 微量成分

\* [ ]内のNo.は照合したJCPDS-ICDDカードのNo.

保存修復の見地からのあきらかな相違点として、二枚の「西周像」に使用されているカンヴァスが異なることが挙げられる。新出の《西周肖像画》に用いられている比較的目の細かいカンヴァスには、ウィンザー&ニュートン社のカンヴァスマークがあった。これは《司馬江漢像》など他の由一作品にも確認されている。また、本研究の連携研究者であり、長年にわたり数多くの由一作品の修復事例に携ってきた歌田眞介氏も指摘しているとおり、二枚の「西周像」に見られるカンヴァスと絵具の固着のよさは、高橋由一の油画技法の特徴を示している。一方で、筆の運び方などの表現の一部に相違が見られることから、他者の関わりも考慮に入れつつ、二枚の「西周像」は、同じ場所で同じ材料を用い、ほぼ同時期に描かれたものと判断された。

## (2) 人文科学のアプローチによる調査結果

新たに《西周肖像画》が確認された太鼓谷稲成神社は、安永2(1773)年に当時の津和野藩主の亀井矩貞が創建したもので亀井家とつながりが深い。この《西周肖像画》については、東京の亀井邸から昭和17(1942)年に津和野別邸に移された後、昭和25(1950)年に亀井家から太鼓谷稲成神社に寄贈されていることがわかった。また、既述のとおり今回の調査で発見された書簡二通のうち、明治25年10月24日付のものには、大礼服姿と平服姿の二種類の西周像の画稿が同封されており、制作時期が明治25(1892)年秋から「洋画沿革展覧会」が開催される翌年10月までの間であることがあきらかとなったほか、肖像画の制作に際して依頼主である亀井茲明に意見を求めていること、またその差出人が源吉であることから、本作の制作に源吉が深く関わっていることが確認された。



画稿（平服姿の西周） 亀井温故館蔵



画稿（大礼服姿の西周） 亀井温故館蔵

肖像画のモデルである西周については、廣石修氏の「西周日記」に関する調査から、肖像画が亀井茲明から西周に贈られたのは、「洋画沿革展覧会」が終了した後の明治26年12月19日であることが判明した。また、『西周傳』（森鷗外編、明治31年、非売品）には、西周像の作者は源吉であるとされているが、森鷗外が最初に記した未定稿本にはこの記述がないことから、源吉が少なからず本作の制作に関わったことを知る者が『西周傳』の編集の段階で、後からその名を付け加えたこと、また、以前から指摘されてきた写真との関係に



については、今回、新たに国立国会図書館憲政資料室西周資料から、大礼服と平服の二種類の西の肖像写真が確認されたことから、制作にあたってこれらの写真が参考にされたことはほぼ間違いないことがあきらかとなった。

源吉については、今回の調査によって晩年期の高橋由一の共働制作者である可能性が一層高まった。角田拓朗氏が指摘するように、工部美術学校など恵まれた環境で洋画を学び、晩年期の由一と行動をとともにしていた源吉には「西周像」を描くだけの力量が備わっていたと考えられ、病身の父を助け、絵筆をとったとしても不思議ではない。一方、依頼主である亀井茲明については、ヨーロッパへの留学経験をもち西洋美術や写真技術に造詣が深く、とくに写真については自らその技術を生かし日清戦争に写真班として従軍した。また、明治天皇成婚25年を記念して、茲明は自らが撮影した写真帖とそれをもとに源吉が油彩で描いた《大婚二十五年奉祝景況圖》25点を合わせて献上していることもわかった。このように、茲明と源吉は本作以外にも共同で制作にあっていることから、茲明と由一・源吉父子は単なる依頼主と受注者という関係を越えて、同じ美術の普及を志す者として「西周像」の制作に携わったものと考えられる。



西周肖像写真（大礼服姿）

国立国会図書館憲政資料室西周資料

### （3）考察

これまで「洋画沿革展覧会」に出品されたのは、津和野町郷土館が所蔵する《西周像》と考えられてきたが、今回の調査から新出の《西周肖像画》にも出品作である可能性が生まれた。なぜ「西周像」が二枚描かれたかという理由については、今回の調査ではあきらかにされなかったが、高橋由一が同じ肖像画を複数描いている例が他にも確認されていることから、当時の肖像画のあり方として、複数制作されることは決して例外的ではなかったと考えられる。

洋画排斥の風潮が下火になったとはいえ、洋画の普及を目指す高橋由一・源吉父子が置かれていた状況は厳しく、病床にある由一の健在ぶりを世間に示すうえでも「西周像」は、「高橋由一」の名で世に出されなければならなかった。本研究会では、こうした状況を踏まえ、新出と既知のいずれの「西周像」についても、源吉との共働制作である可能性を含みつつ高橋由一作と結論づけた。とりわけ、これまで研究がほとんど進んでこなかった源吉についての調査が一步前進したことは、本研究のもうひとつの成果である。



郷土館蔵《西周像》（修復後）



太誠谷稲成神社蔵《西周肖像画》（修復後）

さらに、これら高橋由一の晩年期の代表作「西周像」は、約二年におよぶ調査と修復を経て、描かれた当時の繊細な質感と透明な画面を見事に取り戻し、平成25(2013)年1月から3月まで神奈川県立近代美術館 葉山にて開催された「美は甦る 検証・二枚の西周像」展において初めて二点並べて展示された。51日間の会期中には約5000人の来館者があり、多くの人々がこの調査研究の成果に触れた。

今後の課題としては、二枚の「西周像」を通じて、晩年期の高橋由一と源吉の活動や他の作品のより詳細な再検証を行うほか、明治以来続く画家の意識やあり方、さらには写すことと描くことの相異という、今日にもつながる問題についての再考が挙げられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計3件)

青木茂、伊藤由美、角田拓朗、長門佐季、神奈川県立近代美術館、美は甦る 検証・二枚の西周像展図録、2013、pp.6-8、pp.12-15、p.19、p.58

長門佐季、伊藤由美、増田久美、宮田順一、牧野隆夫、青木茂、歌田眞介、山梨俊夫、廣石修、角田拓朗、新出と既知の

高橋由一「西周像」研究報告書、2014、pp.3-5、pp.8-9、pp.10-11、42-45、pp.48-53、pp.54-58、pp.59-62、pp.63-68、pp.69-74、pp.75-87、pp.88-94  
伊藤由美、神奈川県立近代美術館年報 2012年度、2013、pp.48-49

#### 〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：  
〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

長門 佐季 (NAGATO, Saki)  
神奈川県立近代美術館 主任学芸員  
研究者番号：20393077

##### (2) 研究分担者

伊藤 由美 (ITO, Yumi)  
神奈川県立近代美術館 専門研究員  
研究者番号：50393070

角田 拓朗 (TSUNODA, Takuro)  
神奈川県立歴史博物館 学芸員  
研究者番号：80435825

##### (3) 連携研究者

山梨 俊夫 (YAMANASHI, Toshio)  
国立国際美術館 館長  
研究者番号：10393038

青木 茂 (AOKI, Shigeru)  
文星芸術大学 客員教授  
研究者番号：40159281

歌田 眞介 (UTADA, Shinsuke)  
東京芸術大学 名誉教授  
研究者番号：30272644